

・「意地悪な」イエス

イエスがそこに行かれる途中、群衆が周りに押し寄せて来た。ときに、十二年このかた出血が止まらず、医者に全財産を使い果たしたが、だれからも治してもらえない女がいた。この女が近寄って来て、後ろからイエスの服の房に触れると、直ちに出血が止まった。イエスは、「わたしに触れたのはだれか」と言われた。人々は皆、自分ではないと答えたので、ペトロが、「先生、群衆があなたを取り巻いて、押し合っているのです」と言った。しかし、イエスは、「だれかがわたしに触れた。わたしから力が出て行ったのを感じたのだ」と言われた。女は隠しきれないと知って、震えながら進み出てひれ伏し、触れた理由とたちまちいやされた次第とを皆の前で話した。イエスは言われた。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」(ルカによる福音書八章四二節～四八節)

この物語は、ヤイロという会堂長の娘が死にかかっていたのをイエスが生き返らせた、という物語(八章四〇節～四二節、四九節～五六節)の中に挿入されています。「イエスがそこに行かれる途中」(四二節)というのは、イエスがヤイロの家に行く途中という意味です。そして、この物語は、マタイによる福音書にも(九章一八節～二六節)、マルコによる福音書にも(五章二一節～四三節)出ています。このマタイ、マルコ、ルカの三つの福音書のことを「共観福音書」と読んでいます。マルコによる福音書が、まず書かれ、それを土台として、マタイによる福音書とルカによる福音書が、それぞれの独自の資料と両方に共通する資料を加えて編集された、とされています。それに、第四福音書と言われる、ヨハネによる福音書が新約聖書の中にあります。

私が初めて聖書を読んだのは、旧制高校の一年生の時でした。敗戦後のキリスト教ブームの時代です。占領軍が配布した、当時珍しいカラーの表紙の新約聖書でした。流行ということもあったのですが、高等学校の文科に入ったら、同級生たちの博学ぶりに圧倒されて外国文学や哲学の人名や用語が飛びかっけていて、とてもついていけないので、「よし、今はやりの聖書の言葉で一席ぶってやろう、」という魂胆で読み始めたのです。ところが、一番最初のマタイによる福音書は、まず片仮名の羅列の系図でしょう。これに戸惑いつつ読み進めたのですが、一向に名言が出て来ない。それでも忍耐して、ルカによる福音書くらいまで読んだのですが、前にも読んだことのある物語がまた出てくる、といった調子に、ついに退屈して挫折してしまいました。どうして、もっと丁寧にまとめてないのか、と疑問を持ったものです。しかし、最初の方で申し上げたように、聖書は、単なる名言集ではありません。読み方が全然間違っていたから、挫折するのも当たり前のことでした。

「福音書」は、単なるイエス伝ではありません。イエス・キリストと呼ばれる方が、すべての人を救う救い主なのだ、ということそれぞれの編集者が、その置かれた社会情勢や、教会の状況に応じて、その編集者の信仰と個性に基づいて編み出された、言ってみれば、一つの信仰告白文学なのです。だから、同じようなエピソードが出て来ても、よく読み比べると微妙に違うことが分かります。この「違いが分かる」ようになると、本当に新約聖書が面白くなります。

そこで、冒頭の物語に戻りますが、マタイにもマルコにもこの物語が出ていますから、この物語の出典は、マルコだな、ということが分かります。よく読むと、イエスが「わたしから力が出て行ったのを感じたのだ」と言ったのは、ルカにしかありません。マルコでは、こうなっています。

しかし、イエスは、触れた者を見つけようと、辺りを見回しておられた。(マルコによる福音書五章三二節)

マタイによる福音書では、この部分はなく、この女が、イエスの服の房に触れたら、イエスに「娘よ、元気になりなさい。あなたの信仰があなたを救った。」(マタイによる福音書九章二二節)と言われて、その時に彼女は治った、と書いています。マタイは、病気が治った、という事実を伝えたかったのでしょうか。これに対し、マルコとルカは、その時のイエスを伝えたかったように見えます。これだけでも、それぞれの福音書の個性が表れていることが分かりますね。

ルカの「わたしから力が出て行ったのを感じたのだ」という表現は、マルコの「触れた者を見つけようと、辺りを見回しておられた」の説明ともとれます。混雑していて偶然、体に触れたのとは違う、特別な触れ方をした者がいる、というわけです。もし、私がイエスだったら、このような一見意地悪な仕方はしなかつたらと思うのです。

「あっ、誰か、こっそり触った者がいる。ははあーん、あの女だな。よし、そっとしておこう。内緒にしておきたいのだから。後で、みんなに分からない所で、よかったね、って言うてやろう。」

とまあ、こういうところでしょうか？どこまでも恩着せがましいですね。

しかし、イエスは違う。しつこい。だから、女は隠しきれないと知って、震えながら進み出てひれ伏し、触れた理由とたちまちいやされた次第を皆の前で話した。(四七節)

ということになります。つまり、女に恥をかかせたのです。なぜ、ここまでしなければならなかつたのでしょうか？

もし、私のやり方だったら、女は恥をかかなくて済んだでしょうが、これまでと同じように、世をはばかって生きて行くことになっていたでしょう。しかし、彼女が「皆の前で話した」ことにより、彼女には、内緒にしておくことは何もなくなりました。ユダヤでは、出血が止まらない、ということは汚れを意味していました。(レビ記一五章一九節～二七節)ですから、汚れた者は、人前には出られなかつたのです。宗教的にも汚れているとされていたのです。だから、いつも人目を気にして、人には、あまり見られないようにして生きるほかはありませんでした。いわゆる「きずもの」は、神の前に出るのにふさわしくない、ということだったのでしょう。たいへん差別的のです。

イエスにおける「いやし」は、単に病気を治すことにとどまっていませんでした。病のゆえに差別されている人が、その差別から自由になれるように、という配慮と何よりも、その差別されている人と同じところに立って、その差別を共有することにあつた、ということができると思います。この点について、大阪の釜ヶ崎にある「ふるさとの家」の世話人をしておられる本田哲

郎神父（新共同訳聖書の翻訳にもかかわったカトリックのすぐれた聖書学者でもあります）が、「小さくされた人々のための福音」（新世社、一九九七年一月六日、第一刷）の中で、こうっておられます。

「実は、文字通り『いやす』ということば laamai が出るのは、マタイとマルコ両福音書について言えば、合わせて五回しかありません。それもすべて、結果として『いやし』が行われたことの報告という形、もしくは『いやされたい』側の期待のことばとして出るだけです。あとはすべて『奉仕する』という意味のまったく別のことば Therapeu。です。マタイとマルコ合わせて二十一回も出てきます。英語 Therapy の語源となったことばですが、これを病人に対して当てはめるとしても、『看病する』『手当てする』というのが妥当な線です。それを同じように『いやす』と訳していたわけです。

（中略）手当てをして、結果として『いやし』が起こって、イエス自身『深い感動をおぼえた』という事例すら、福音書は記録しています（マタイ九・三〇、マルコ一・四三）。イエスにとって、神の国を実現するために本当にだいじなことは、『いやし』を行うことではなくて、『手当て』に献身すること、しんどい思いをしている仲間のしんどさを共有する関わりであったことは明らかです。」（前掲書二四五～二四六頁）

イエスが一見意地悪に見えることをされたのは、「しんどい思いをしている仲間のしんどさを共有する関わり」だったのです。そのために、彼女が、人の裏側にいつも隠れて暮らしてきた「生き方」から解放されなければならなかったのです。だから、「皆の前で話す」ように仕向けられたのです。もう、彼女は誰はばかる必要はなくなりました。イエスの力を「盗んだ」という引け目を抱えて生きる必要はなくなったのです。

神様が、一見意地悪されているように思えるときは、よくあります。敗戦の年に、父親と財産の両方を失いました。私も教会へ行くようになる前には、神様は意地悪だ、という思いから抜けられないでいました。私から、父親と財産の両方を奪わないで、どちらかを残してくれたらよかったのに、とどんなに思ったことでしょうか。高校の同級生が、父親から教えてもらったとか、父親に買ってもらった、というような話を聞くと、うらやましくてならなかったものです。しかし、イエス・キリストを通して神様を知った今となれば、そのつらい経験は、通って来なければならなかった、神様からの大事な試練だったのだ、と思えるようになりました。

あなたがたは、これを鍛練として忍耐しなさい。神は、あなたがたを子として取り扱っておられます。いったい、父から鍛えられない子があるのでしょうか。……およそ鍛練というものは、当座は喜ばしいものではなく、悲しいものと思われるのですが、後になるとそれで鍛え上げられた人々に、義という平和に満ちた実を結ばせるのです。（ヘブライ人への手紙一章七節、一一節）